



令和5年 № 85  
秋ひがん号

# あきばさん

発行人／発行所  
秋葉山 新井寺  
272-0144  
千葉県市川市新井  
1丁目9の1  
電話047-357-8319  
FAX 047-357-8399  
mail: info@shinseiji.jp  
http://www.shinseiji.jp  
郵便振替00150-2-282968

暑さ寒さも彼岸まで

## 山号と寺号について

当山住持

「暑さ寒さも彼岸まで」と伝えられませんが、今年は秋彼岸の月に入ってもいまだ残暑が続く、「好時節」というにはほど遠い毎日です。

「彼岸」とは、仏教的には現実の何かと勝手にままたまらない悩み・苦しみを多き日常生活や人生から心豊かに平和に導かれるお悟りの世界への心の修養期間でもあります。「彼岸」のたびに布教教化しておりますが、彼岸に到る六度の修行をさらに自覚認識され、この上ないご精進を積み重ねてください。

さて、本号では、当山の山号と寺号についてお話し申し上げます。当山は、山号を「秋葉山―あきばさん」、寺号を「新井寺―しんせいじ」といいます。

山号の秋葉山は、秋葉信仰の火の用心、火防の守護神「秋葉三尺坊大権現」様からのご縁です。秋葉三尺坊様は、「家焼くな心を焼くな朝夕に 秋葉三尺坊の祈りまもりて」とお示しされます。

秋葉山の御本山は、静岡県袋井市の秋葉總本殿 可睡斎です。可睡斎は、曹洞宗の修行道場「専門僧堂」にもなっています。多くの修行僧が日夜厳しい仏道修行に精進しています。

また、御本山では、毎日早朝より修行僧たちが、全国の秋葉信仰の皆様、有縁無縁の火防祈願の皆様のために、家内安全、火災消除、諸難消滅、諸縁如意吉祥を祈って、ご祈祷を修行しています。毎年十二月十五日には、伝統的な火防大祭（秋葉の火まつり）が夜を徹しておごそかに行なわれています。

当山でも、常に、地元の秋葉講中の皆様、檀信徒および信心の願主の皆様との和への火防祈願を行なっています。とくに、毎年十一月十八日には、火防大祭を修行しています。

寺号の新井寺については、元和二（一六一六）年 開創当時のエピソードに由来します。当時、たびたびの天災地変に見舞われ、地域社会は困窮していました。ある和尚様が、災害復興のために、地域の皆様と同心同行に難行苦行を修行されました。その功德として、新たに井戸が湧き出で、地域社会の何よりの命の水となりました。そうしてこんにちの新井寺が出發しました。

現在、行徳・浦安地区では唯一の曹洞宗寺院です。福井県の大本山永平寺と神奈川県の本山總持寺を御本山とし、御本尊は「お釈迦様―釈迦牟尼仏」で、「南無釈迦牟尼仏―なむしゃかむにぶつ」とお唱え申し上げます。

# 梅花流詠讚歌に学ぶ瑩山禅師様 第三回

## 七〇〇回大遠忌にちなんで

大本山總持寺御開山 太祖瑩山禅師

様の七〇〇回大遠忌にちなんで、梅花流詠讚歌を通じて瑩山禅師様のご生涯やみ教えをお伝えしていきます。第一回は「太祖瑩山禅師誕生御和讃」からご生

誕からご出家まで、第二回では「太祖常濟大師瑩山禅師修行御和讃(菩提)」

からご修行時代とおさとりについて学びました。今回は、十数年にわたって

住職をつとめられた大乘寺時代のことをお伝えしてみたいと思います。



大乘寺 法堂 (はつとう：ご本堂)

◆ 太祖常濟大師瑩山禅師入寂御和讃

● 大法の光明を世に揚げぬ『伝光録』

(一) 本師の旨をうけまして

筆執りたもう大乘寺

常世の光 名も高き

伝光録を著わしぬ

一 二九八年、瑩山禅師様は、義介禅師様(永平寺第三代・大乘寺開山)のあとを受け継ぎ、大乘寺(石川県)二世となられました。三十五歳のときのことです。

一三〇〇年のお正月からは、義介禅師様に代わり、お釈迦様から脈々と伝わる仏法が、お師匠様からお弟子様に伝えられてきた様子について提唱(講義)をされます。お釈迦様から孤雲懷慧禅師様にいたるまでの五十三人のエピソードとともに、仏教の基本的な教え、生世世にわたって身心をかけて行じて

いく仏道修行の覚悟や心構えなども示されています。そこには、瑩山禅師様の修行僧へのおもいはるか未来に仏法が伝えられていくことへの願いが感じられます。

このご提唱はお弟子様によって筆録(書き残すこと)され、のちに『伝光録』としてまとめられました。光とは仏法のこと。道元禅師様の『正法眼蔵』と同じく曹洞宗において重要な祖録となつていきます。

● 『伝光録』にまなぶ

『伝光録』のお言葉を紹介します。

● 人人悉く道器なり。日日是好日なり。ただ子細に参と不参とに依りて徹人未徹人あり。

第十祖 脇尊者章

お釈迦様は、だれもが「ほとけの種子」お釈迦様は、だれもが「ほとけの種子」を具え、「ほとけ」であると説かれました。また、瑩山禅師様は、ひとり残らず尊い仏道に導きたいと願っていました。しかしながら、何もせずして「ほとけ」ではありません。たいせつなことは、どんなときも、どんなことも、





永光寺(ようこうじ)山門へとつづく石段

やるか、やらないか。ほとけ様の教えを学び、行じるところにその仏種が花開くのです。そして、日日是好日に、心ゆたかな人生を生きることができると説かれているのです。

### ● 瑩山禅師様の教えを求めて

このころ、中国禅宗第三祖鑑智僧璨かんちそうざん禅師様の『信心銘』を解説した『信心銘拈提』や坐禅についてのお示し『坐禅用心記』・『三根坐禅説』なども書かれています。

気力も体力も充実した三十代半ばから四十代の瑩山禅師様は、修行僧をじかに指導する立場となり、お釈迦様の

正伝の仏法をご自身で再認識すること、その教えを伝えていくことのたいせつさを感じられていたのでありましょう。さらには、当時、さまざまな宗派が独自の活動や教線をひろげていく中で、曹洞宗の教えをよりたしかなものとして、お釈迦様の正伝の仏法を担い、曹洞宗を盛んにしていく人材育成へのところざしを深くされていたのかもしれない。

瑩山禅師様の教えを求めて多くの優れた禅僧たちが集うようになりました。その中には、のちに大乘寺のあとを継がれる明峰素哲禅師様や總持寺第二代となら

れる峨山韶碩禅師様の姿もありました。そうして大乘寺は一躍天下の大叢林(修行道場)として活気づいていくのでした。

一三〇九年九月、お師匠様 義介禅師様が九十一歳でお亡くなりになります。

そののち、一三一一年十一月、大乘寺の住職を明峰素哲禅師様に譲られ、加賀の浄住寺じょうじゆじに向かわれます。浄住寺は、瑩山禅師様のお父様の菩提を弔うため

に建てられたお寺で、瑩山禅師様が入られる前は、お母様の懐観大姉が仏事供養を行なっていたとされています。

### ● 深きなさけのありがたさ

(一) 深きなさけのありがたさ

老いも若きも一様に

慕い仰ぎて寺を建て

正しき教えさかえたり

瑩山禅師様は、お弟子様の育成とともに一般の人びとへの布教教化も熱心に行なわれました。そこには、つねに人びとに寄り添う深い思いやりの心がありました。そのおもいが「深きなさけのありがたさ」とうたわれています。その瑩山禅師様を慕う多くの人びとの寄進や篤志によって永光寺ようこうじ(石川県羽咋市)や總持寺祖院すくぢじ(石川県輪島市)などが建てられました。そして、そのお寺が仏道修行と信仰の道場となつていよいよ仏法が栄え、曹洞宗の教えがひろまっていくことになるのです。そのご様子は、次号にて。

(副住職しるす)

## みなさまへ

## ● 月例行持を再開します

コロナ禍により、お休みさせていた  
だいておりました月例行持（坐禅会・  
写経会・梅花講）を再開いたします。  
再開にあたりましては、引続き、マスク  
着用・消毒などの感染対策を行なつて  
まいります。皆様のご理解とご協力の  
ほど、よろしく御願ひ申し上げます。  
再開の時期など、くわしくは、お気  
軽におたずねくださいませ。

## ● 振替口座をご活用ください

新井寺では、ゆうちょ銀行の振替口  
座を開設しています。どうぞ、ご活用  
ください。

記号番号 00150-2-292969

## これからのしんせいじの行持

## どなたでも参加いただけます

九月二十三日 秋ひがん法要

十一月十八日 秋葉火防大祭

十二月八日 釈尊成道会

十二月三十一日 年越し坐禅会

※ 変更や中止となる場合があります

## ● 月例坐禅会 ● 月例写経会

## ● 梅花講（御詠歌）月二回午前九時半

※ 詳細はおたずねください

## 秋葉火防大祭のご案内

## 十一月十八日

十時半・十一時半・

一時半・二時半

にご祈禱をおつとめします

火を使う機会が多くなる毎年初冬、  
十一月十八日に火防大祭をおつとめ  
しています。火防せの守り神様「秋葉  
三尺坊大権現」様に、檀信徒の皆様を

はじめ、近隣地域の皆様、有縁無縁の皆  
様の家内安全、火災消除、諸難消滅、  
心願成就、諸縁如意吉祥（あらゆるし

あわせ）を祈念して御祈禱を行ない、火  
の用心の「御札」をお授けします。

火は、日常生活に欠かすことができ  
ません。しかし、ひとたび使い方をあや  
まるとすべてを焼き尽くし、いのちま  
でも奪いかねない恐ろしさもあります。  
また、人生のしあわせは「心」の火の  
コントロールしだいともいえましよう。

「物心の火の用心」に、どうぞ、お参  
りいただき、秋葉三尺坊様のご加護をう  
けられますようご案内申し上げます。

郵送祈禱も受付けています。

## 編集後記

十月五日は、中国禅宗の初祖 達磨大師  
様のご命日です。赤い張り子の「だるまさ  
ん」は、多くの人びとに親しまれています。

「不安で仕方がありません。どうしたら  
よいでしょうか」とお弟子様に相談をされ  
た達磨大師様は、「その不安をここにもつ  
てきなさい」といわれました。不安は、目  
にも見えず、かたちもないので、もつてく  
ることはできません。そこでお弟子様は、  
かたちなない、目には見えないものにふり  
まわされていた自分に気づいたのです。

わたしは、毎日を安心して生きていくこ  
とが、何よりのしあわせだと考えています。  
しかし、現実には、つきからつきへとやっ  
てる不安におしつぶされそうな毎日です。  
達磨大師様のお弟子様のように、よくよく  
ふりかえってみると、不安は自分の心がつ  
くりだしたものであることに気づきます。  
わたしたちの心は、自分自身の外側のこと、  
内側のこと、さまざまなことと変わり、動  
いています。その心に惑わされず、いま、  
ここに全力で向きあう。いま、ここに没頭  
する。いま、自分ができることを精いっぱい  
いやってみる。そうすることで、その不安  
はいつの間にか、消えてしまうのだと、達  
磨大師様は教えてくださっているのです。  
時節柄、ご自愛くださいませ。